

コラム 83 — エジャートン・ノーマン

ノーマンは、日本生まれのカナダ人外交官であり、1957年エジプトのカイロで自殺しました。ノーマンは、「日本研究の大家」として知られていましたが、ソ連諜報部に属するスパイ・工作員であり、占領期の日本の全領域において、隠れた形で絶大な影響を及ぼしました。とりわけ、「戦後知識人」と呼ばれた左派の学者・マスコミに大きな影響を残しました。

米国政府の中枢にいた、ソ連のスパイであったラティモア（コラム 67 参照）の計らいで、ドイツの外交官であったノーマンは、戦後、直ちにアメリカ占領軍当局（GHQ）の諜報部局の中枢である対敵諜報部（CIC）の調査分析課長というポストで東京にやってきました。ノーマンが果たした大きな役割の1つが、「日本国憲法」の制定に大きく関わったことでもあります。ノーマンは、マルクス主義憲法学者として知られた鈴木安蔵を担ぎ、現在の憲法に最も近似した「GHQ憲法」、いわば「コミンテルン憲法」を作成させます。2つ目は、戦犯指定と公職追放指名に関してであります。戦犯指定や追放者の指名は、調査分析課が鍵を握り、反共の「オールド・リベラリスト」が数多く追放され、戦後の日本社会に大きな影響を残し、今にいたっても、戦前の日本悪玉論が、政治家、知識人、マスコミ等に根強く残っているのは、まさに、ノーマンの役割が大きかったのであります。